

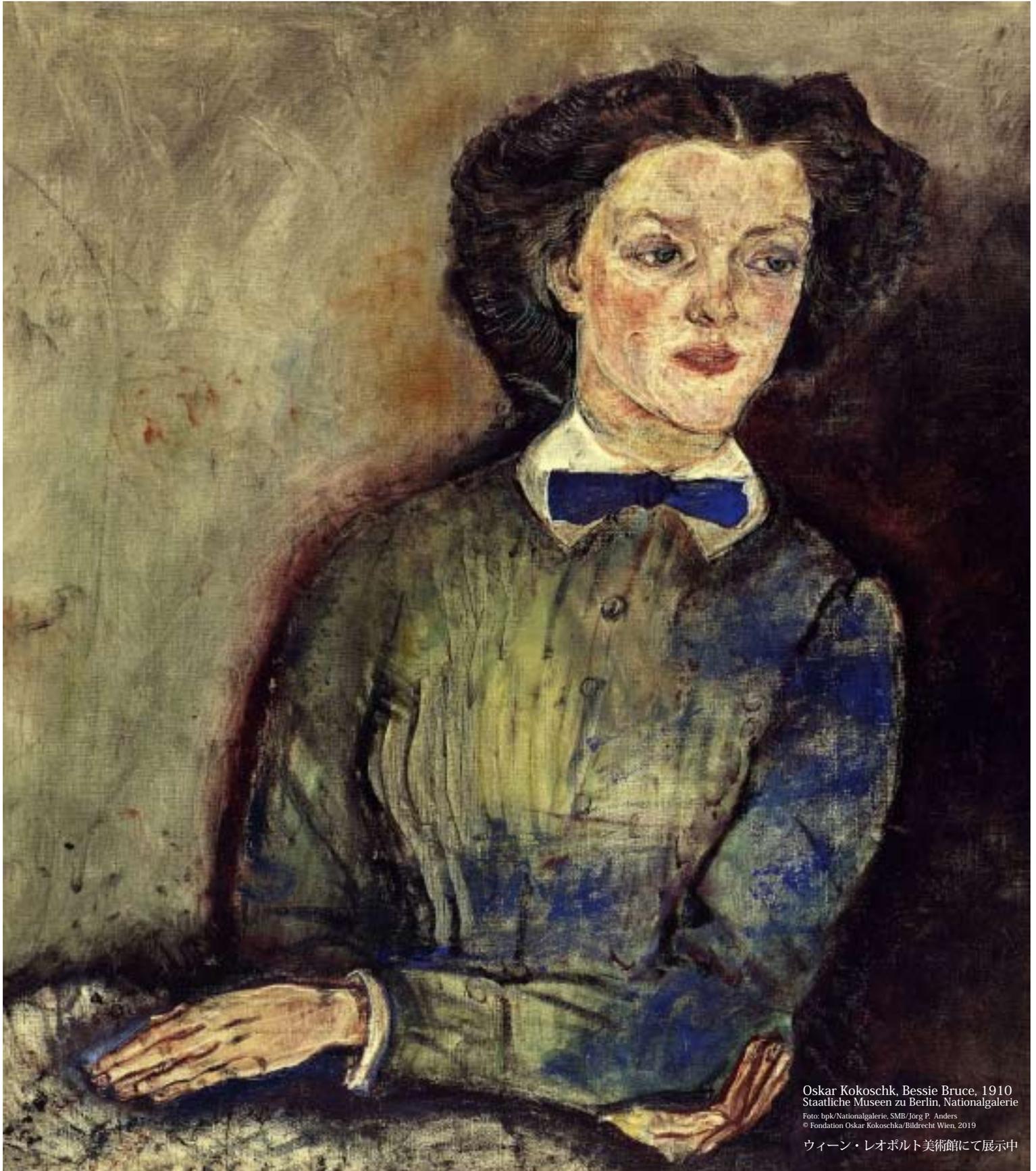
月刊ウィーン

GEKKAN-WIEN 2019年6月号

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊31年目 **Nr. 357**



Oskar Kokoschka, Bessie Bruce, 1910
Staatliche Museen zu Berlin, Nationalgalerie

Foto: bpk/Nationalgalerie, SMB/Jörg P. Anders
© Fondation Oskar Kokoschka/Bildrecht Wien, 2019

ウィーン・レオポルト美術館にて展示中



杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 90

欧州原子力委員会(ENS)の発表によると、世界中で八万人以上の科学者を代表する四二の原子力関係学協会が五月三日、仏国のジュアン・レ・パンでクリーン・エネルギー関係の研究開発費を倍増させるよう求める共同宣言を採択した。

五月末にカナダのバンクーバーで開催されるクリーン・エネルギー大臣会合に向け、仏原子力学会が中心となつて取りまとめたもので、今後五年以内に原子力関係の研究開発と技術革新用の公共投資額を倍増させるため、最大限の努力を傾注していくと宣言。先進的原子力システムの革新的な応用に重点的に取り組むべきとしており、それによって将来クリーン・エネルギーによるエネルギーミックスも可能になると呼びかけている。

ENSは、各国の政策立案者に対するこの国際的な呼びかけに加わっており、五月末に予定されている関係イベントにおいて、原子力技術革新に関する広範な多国間協議が閣僚レベルと実務者レベルの両方で展開されることを期待し、原子力に内在する全ての潜在能力を各国のクリーン・エネルギー・ポットフォリオ用に開放するとともに、各国と世界、両レベルの脱炭素化に向けて貢献させたいとの目標を掲げている。

ENSによると、核分裂と核融合を合わせた原子力研究開発に対する公的支援は、二〇〇〇年以降、世界レベルで見ても常に年間四〇億ドル程度に留まっている。また、多くの国では民間部門における原子力研究への投資熱意が低下しているが、これは、原子力研究を取り巻く否定的な政治環境や市場環境、財政環境によるものだとした。



これに対して原子力産業界は近年、小型モジュール炉や第四世代原子炉など、新しい原子炉設計の開発やデジタル化において、技術革新の新たな波に取り組んでいる。また、脱塩や地域熱供給、産業界へのプロセス

に、原子力発電の活用で新たな機会を市場にもたらすと期待されるが、それには多額の研究開発資金と新しい技術革新アプローチが必要だとENSは指摘した。ENSはまた、欧州規模で実施される研究・技術革新の促進枠組プログラム「ホライズン二〇二〇」では、「クリーンで安定した効率的なエネルギーのプログラム」に二倍以上の予算が割り当てられていると強調。同プログラムの対象には原子力が含まれておらず、このような状況がENSを今回の共同宣言

に参加させることになったと説明している。さて、今月のウィーンと京都の対比では、両市が生んだ生年が近い著名な画家その三について述べる。一八八六年、ウィーン郊外のペヒラルンで生まれたオスカー・ココシユカは、少年時代をウィーンで過ごし、一九〇九年までウィーンの工芸学校で学んだ。作曲家マラーの未亡人、アルマと恋愛関係にあつた時に描いた『風の花嫁』は、最も有名な作品の一つ。その後、第一次世界大戦に従軍し、ドイツのドレスデンに滞在してドレスデン美術大学の教授を務めた。ナチス政権下の三三年にはプラハに逃れ、第二次世界大戦前後はロンドンで過ごすなど、コスモポリタンのな生活を続けた。第二次大戦後はスイスに定住し、毎年、ザルツブルクで美術セミナーの講師を務めるなど、後進の育成にあつた。

クリムト、シーレと並び、近代オーストリアを代表する画家の一人である。六〇年にエラスムス賞を受賞し、八〇年、スイスのモントルーで没した。

一方、一八八八年、京都市下京区に生まれた梅原龍三郎は、一五歳で画家を志し伊藤快彦に師事。その後設立された聖護院洋画研究所(現・関西美術院)に入った。一九〇八年、仏留学後はパリに滞在、ルノワールの指導を受けた。一三年に帰国して油絵展覧会を開催。三五年には帝国美術院(現・日本芸術院)会員。四四年には帝室技芸員及び東京美術学校(現・東京芸術大学)教授になった。五二年に同校教授を辞任して渡欧、ヴェネツィア・ピエナナレの国際審査員を務めた。同じ年に京都市中京区に生まれた安井曾太郎は、聖護院洋画研究所に入り、梅原と一緒で学んだ。〇七年、渡欧しセザンヌの影響を受ける。一四年帰国し翌年二科展に出品し、二科会会員に推挙される。三〇年頃から独自の日本の油絵の様式を確立。四四年に東京美術学校教授及び帝室技芸員となる。少年時代から良きライバルだった両者は洋画界の頂点を極め、日本洋画壇の双璧と謳われ、五二年にそろって文化勲章を受章した。

余談であるが、ウィーン駐在時にレオポルト美術館でココシユカの『トレクロックチ峠』ドローミテの風景』や自画像を観た。京都では京都市美術館にある梅原龍三郎の『秋山烟景』や京都国立近代美術館にある安井曾太郎の『婦人像』などを観た。両市の生年が近い著名な画家にまつわる話を紹介できた幸運に感謝しつつ、編集部撮影をお願いしたココシユカが住んでいた家の近くの胸像写真を掲載させていたたく。



■杉本純 元京都大学教授
元原子力機構ウィーン事務所長

杉本純の原子力の話II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています： <http://wattandedison.com/Sugimoto.html>

映画『第三の男』初公開70周年



第二次大戦後のウィーンを舞台にした映画「第三の男」は1949年9月にロンドンで初公開された。今年70周年を迎えるにあたり、第三の男ミュージアムでは2020年1月4日まで記念展を開催中。オープニングでは第三の男ミュージアムの創設者で館長のカリンさんとゲアハルトさん、ウィーン観光局局長、在オーストリア英国大使がスピーチを行い、コルネリア・マイヤーさんがチャターを演奏した。9頁参照。



映画「第三の男」野外上映
8月31日 市庁舎前広場
Filmfestival ※入場無料

